

News letter No.3



2016.3
第3号

第3回日本シニア小児科医連盟会議開催にあたり



内容

1. ご挨拶

代表幹事 衛藤義勝

2. 第3回協議会について

第3回会長 山城雄一郎

3. 抄録

吉岡 章

山城 雄一郎

4. 幹事名簿

ご挨拶

日本シニア小児科医連盟
事務局幹事 衛藤義勝
(財団法人脳神経疾患研究所)

本年の日本シニア小児科医連盟総会は5月13日（金）札幌での日本小児科学会に合わせ、ロイトン札幌で山城雄一郎会長の下に開催されます。今回は総会のあと吉岡章先生（奈良県立医大前学長）並びに山城雄一郎先生（順天堂大学プロバイオティクス講座）の特別講演が開催されます。お二人とも国際的にご活躍され、大変素晴らしい学術講演会になるかと存じます。是非沢山の皆さまのご参加をお願い致します。御陰様で日本シニア小児科医連盟（Japan Senior Pediatric Association, JSPA）会員数も順調に増え現在80名近くになりました。会員資格は65歳以上の小児科医でどなたでも会員になれますので、是非JSPAにお入り頂き、ご活躍お願い申し上げます。講演会終了後、皆さまと札幌の夜景を見ながらロイトン札幌の20階パールホールでご歓談致しましょう。多くの皆さまのご参加をお待ちします。ホームページでもご参加を受け付けております。

HP： <http://www.senior-ped.net/>





【日時】 2016年5月13日 (金)
17:30～21:30

【会場】 ロイトン札幌
20階 パールホール

【会費】 10,000円

第3回 日本シニア小児科医連盟 総会&学術会議

会長：山城雄一郎
(順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座特任教授)

第3回協議会について

第3回会長 山城雄一郎

第3回日本シニア小児科医連盟会議のお世話をする役目を昨年のお阪での当会の席上仰せ付けられました。この会の主旨の一つは、一般的な定年である65歳を越しても、活動的で医療分野で活躍している方々は大勢おられ、これら小児科医が引続き小児医療に貢献し続けて頂き、その為の交流機会を設けて、情報交換しかつお互いの健闘を讃え合う事です。その一環として、会員の活躍の現状を毎回、発表して頂いております。今回は奈良県立医大前学長 吉岡 章先生の血友病の治療研究に関する話題で、奈良県立医大小児科の伝統が脈々と息づいている研究成果の一つと拝察致します。他に一題ある話題提供者は小生で、シニア世代の健康と腸内細菌について、お話しさせて頂く予定です。

プログラム

17:30- 受付

17:45-18:30 総会

18:30-19:00 特別講演Ⅰ 吉岡 章 (奈良県立医科大学前学長・名誉教授)
“血友病の新規止血治療薬の開発研究”

19:00-19:30 特別講演Ⅱ 山城雄一郎
(順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座特任教授)
“高齢者が生き生きとするプロバイオティクスと栄養”

19:30-21:30 意見交換会 (ロイトン札幌 20階にて)

「血友病止血治療薬開発の革新的展開」

奈良県立医科大学

前学長・名誉教授 吉岡 章

抄 録

血友病の止血治療薬は、過去約50年の間に全血・血漿輸血からクリオプレシピテート剤、非加熱・加熱濃縮因子製剤、モノクローナル抗体精製製剤（以上、血漿由来）、そして、遺伝子組換え型製剤へと発展してきた。この間、血液由来感染症の克服と超高純度化は製剤の安全性を大きく進化させ、さらに、包括ケアと定期補充療法（予防投与）の導入、そして、医療費公費化が相俟ってわが国の血友病患者のQOLを飛躍的に向上させた。

一方、乳幼児期からの週に何回もの静脈注射やインヒビター（同種抗体）の出現、加えて、医療経済的側面からも今日の血友病治療はなお大きな課題を抱えている。現在、これ等を一気に解決する革新的技術が開発されつつある。より持続的な止血効果を発揮する半減期延長型製剤やより強力な止血凝固作用を有するバイパス止血薬に加えて、全く新しい血液凝固コンセプトによる新規止血薬が開発されている。特に、奈良医大小児科と中外製薬が開発し、国際的の第III相臨床試験中の「抗体製剤（ACE910）」は血友病Aの革新的治療薬として世界中で期待されている。

「高齢者が生き生きとするプロバイオティクスと栄養」

順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座

特任教授 山城雄一郎

近年の研究から腸内細菌は宿主の健康の疾病感受性に影響する事が明らかになって来た。腸内細菌は1,000種以上、100兆個以上存在し、はいわゆる善玉菌と悪玉菌に大別される。善玉菌の代表であるbifidobacteriaは、腸管の解剖、生理、生化学的発達に寄与し、腸管免疫の発達にも重要な役割を演じ、50歳代まで優位菌として存続する。個人差はあるが60歳代から徐々に減少し始め、80歳代では10%以下に低下する。それ故、高齢者は全身性免疫に加え腸管免疫能も低下し、易感染性を示す。演者らは、高齢者医療施設に入院中の平均85歳、100名をLact. C. S.含有発酵乳摂取群とプラセボ群の2群に分け、6ヶ月間の連日摂取効果を検討した。その結果、Lact. C. S. 摂取群では発熱の頻度、その持続期間、下痢、便秘の頻度が有意に少なかった。

一方、n-3系脂肪酸のDHAは乳幼児の知能発達に重要で、脂肪細胞増加抑制（肥満予防）、炎症反応の抑制そして認知症予防効果の可能性も示唆されている。

上述の知見を基に、高齢者が元気で活動出来るプロバイオティクスを活用した栄養法を提案する予定である。



幹事名簿

衛藤 義勝	(財)脳神経疾患研究所先端医療センター長、東京慈恵会医科大学名誉教授
山城雄一郎	順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座教授、名誉教授
安次嶺 馨	沖縄県立中部病院ハワイ大学卒後医学臨床研修事業団ディレクター
清野 佳紀	大阪保健医療大学
青木 継稔	
浅野 喜造	北海道大学大学院獣医学研究科
浅見 直	新潟青陵大学看護学科
阿部 敏明	あしかが森足利病院
泉 達郎	大分大学医学部小児科学講座
伊藤 進	香川県地域医療支援センター
上田 一博	医療法人三生会 みちがみ病院
植地 正文	東京福祉大学社会福祉学部
内山 聖	新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院
衛藤 隆	
遠藤 文夫	熊本大学大学院生命科学研究部小児科学分野
大関 武彦	共立女子短期大学看護学部看護学科
太田 孝男	琉球大学大学院医学研究科育成医学講座
大野 耕策	独立行政法人労働者健康福祉機構 山陰労災病院
岡田 真人	聖隷福祉事業団 法人本部
岡田 知雄	板橋区医師会病院 小児科
小田 慈	
金子 隆	東京都立小児総合医療センター 血液・腫瘍科
児玉 浩子	帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科
小宮山 淳	松本秀峰中等教育学校
近藤 直美	平成医療短期大学
佐々木 望	埼玉医科大学 かわごえクリニック
城 宏輔	すずき小児科
杉本 徹	済生会滋賀病院
高田 五郎	仙台オープン病院
高橋 弘昭	千葉市療育センター
高柳 正樹	千葉県こども病院
武田 英二	徳島健祥会福祉専門学校
谷澤 隆邦	たにざわこどもクリニック
土屋 滋	東北文化学園大学
寺崎 智行	岡山赤十字病院
戸苅 創	名古屋市立西部医療センター 新生児 医療センター
富和 清隆	東大寺福祉療育病院
中澤 眞平	
中村 肇	阪神北広域救急医療財団
仁志田博司	慈誠会マタニティーホスピタル(慈誠会病院)
沼口 俊介	沼口小児科
白幡 聰	北九州八幡東病院
濱岡 建城	京都府立医科大学大学院医学研究科 小児循環器・腎臓病学
浜崎 雄平	佐賀整肢学園からつ医療福祉



幹事名簿

早坂 清	
福永 慶隆	
船戸 正久	大阪発達総合療育センター
古川 漸	実践女子大学 生活科学部 食生活科学科
星加 明德	
細谷 亮太	聖路加国際小児総合医療センター
堀内 勁	
松石豊次郎	久留米大学医学部小児科
松尾 雅文	神戸学院大学総合リハビリテーション学部
真弓 光文	福井大学
三池 輝久	兵庫県立リハビリテーション中央病院
満留 昭久	学校法人高木学園 福岡国際医療福祉学院
宮田晃一郎	社会福祉法人たちばな会オレンジ学園
麦島 秀雄	日本大学医師会
村上 睦美	東京都予防医学協会 保健会館クリニック
森川 昭廣	北関東アレルギー研究所
横田 俊平	横浜市立大学小児科
吉岡 章	奈良県立医科大学
芳野 信	久留米大学高次脳疾患研究所
伊予田邦昭	福山市こども発達支援センター
井上 謙吉	医療法人 日吉いのうえ小児科
雨宮 伸	埼玉医科大学病院
永井利三郎	大阪大学大学院医学系研究科保健学
河 敬世	大阪府立母子保健総合医療センター
河野 斉	福岡徳州会病院小児科
河野 陽一	千葉労災病院
隅 清臣	隈クリニック小児科・神経内科
桑原 正彦	桑原医院
黒田 恭弘	山野 恒一 四天王寺和らぎ苑
小川 實	小川クリニック
小田 慈	岡山大学医学部保健学科・大学院保健学研究科
松平 隆光	松平小児科
西 美和	三原赤十字病院小児科
大澤真木子	東京女子医科大学
中畑 龍俊	京都大学iPS研究所
津留 徳	つるのぼるクリニック小児科
藤村 正哲	
飯沼 一字	NPO法人「子どもの村東北」
浜本 芳彦	浜本小児科
別所 文雄	日本医療科学大学保健医療学部
保科 清	山王病院小児科
門田 正担	春野うららかクリニック
柳澤 正義	日本こども家庭総合研究所

